

Popper Letters

ポパーレター：日本ポパー哲学研究会会報

1990

Vol. 2, No. 1

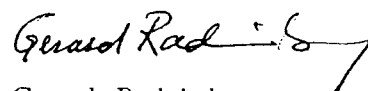
日本ポパー哲学研究会事務局

日本ポパー哲学研究会に寄せて

(1990年 5月号)

The founding of the "Japan Popper Society" is really good news for all those interested in philosophy of science *and in science*, and for the friends of the Open Society. The founding of the Society is so important because it will be essential in spreading these ideas in Japan, a country, which has become a leader in economic and technological progress. Hence, those interested in Critical Rationalism have good reasons to hope that they will progressively enjoy more and more contributions to this field from Japan. Popper is the most important philosopher of science of this century. He has brought about a turn from inductivism to falsificationist methodology, and recent investigations confirm that his methodology is superior to its rivals (Kuhn, Lakatos, structuralism, incommensurability thesis). He has also brought about a turn in epistemology: from justificationist (foundationalist) philosophy to criticism. In political philosophy, Popper's seminal ideas from his classic The Open Society have had a beneficial influence on politicians and political parties in the whole of the political West.

Ever,



Gerard Radnitzky

内容

- | | | |
|--|-------|--|
| 1. 日本ポパー哲学研究会に寄せて | ----- | Gerard Radnitzky、山田雄三、
団藤重光、沢田允茂 |
| 2. 年次研究会及び総会開催のお知らせ | ----- | 事務局 |
| 3. ポパー哲学の魅力 (論説 報告) | ----- | 濱井 修 |
| 4. 急逝 William Warren Bartley III | ----- | Stephen Kresge、小河原 誠
Gerard Radnitzky |
| 5. <u>The Popperian legacy in economics</u>
ed. Neil de Marchi (新著紹介) | ----- | 堀越比呂志 |
| 6. 掲示板 | ----- | 堀越比呂志、小河原 誠
富塚嘉一 |
| 7. 原稿依頼 | ----- | 事務局 |

これまでの科学認識論では、論理と実証の手続きによって確実な知識に達するものとされている。ポバーはそれを否定し、そこでは主観的確信に安住するに過ぎず、客観性にはかかわりがないという。研究の自由のもとでは科学者の個人プレーから離れることはできないが、大切なことは各人が共同して真实性を追い求め、未解決の問題にとり組むという心構えをもつことである。そのためには主観間の相互批判によって主観的確信から脱出する必要がある。そこに科学知識論の「ポバー的轉回」がある。ところで主として経済学に見られることだが、完成した体系に囚われ、未完成なものへの限りなき探求ということを考えないから、主観間の相互批判という「ポバー的轉回」が十分に活かされないのである。

愉しかったポバー博士訪問

団藤重光

ポバー博士をケンレーの自邸に初めてお訪ねしたのは、昨秋の訪英のときのことであった。わたくしはいわゆるポバーリアンではないが、博士の批判的合理主義との接点を模索しているうちに、見出したのが博士の「科学的方法の間主体性」(Open Society and Its Enemies, Vol.2, p.217)の説である。わたくしの刑法理論の根幹をなしている主体性の理論には、その一場面として間主体性ということがあるからである。だから、博士との1時間近い会談は実に楽しく、かつ、有益なものであった。博士から頂いた書簡をも含めて、いつかこの紙上で報告するつもりである。

思い出すと私がポバーの哲学に関心をもつようになったきっかけは誤りからである。というのはポバーの「探求の論理」の序文だけが最初に日本語にドイツ語から翻訳された文章を読んで、どうしても理解できなかったので、わざわざドイツ語の原書を図書館からかりてきて見た。原文を参照してみると、ドイツ語の‘von’を「から」と訳すべきところを「の」と訳してあったために日本語訳では意味を為していなかったため、改めてドイツ語で拾い読みをしていったことが関心の出発点だったのである。そしてポバーが数日間来日したとき私の質問にたいしてポバーが全く答えにならない答えをしたとき、この人は何と頭の堅い人だろうと思ったところ、二年ほど経って彼の論文の中で私が質問のときに指摘したことをそのまま受け入れるような考え方をしているのを発見して改めて私の思想との親近性を感じて興味をもったものである。この頃からポバーの思想が進化論的方法を明確にしてきたので、私自身が考えていた進化論的な考えと歩調を同じくしてきたことも関心の原因であった。ただし彼の進化論的認識論はまだ土台を作っただけで細かい所では余り具体的な説明がされていなかったため、私自身は(ポバーの嫌いな)言語への関心と結びつけてこの残された問題をより具体的にとり組むことになったのである。そしてこれと同時にポバーがカントの現代版であること、そしてカントが「判断力批判」で関心を向けたのと同じことがポバーの進化論的轉向となって現われたのではないか、という考えが私自

身の考え方の歩みと何か似ている気がして親近感を覚えるようになったのである。こうしてみるとヴィトゲンシュタインとポパー（通常は相反する関心の代表者のように思われているが）を結びつけることがどうも私自身の歩みの方向となってきたようである。



記念館案内図



東京都千代田区神田駿河台3丁目11番5
☎ 03(292)3111

年次研究会及び総会開催のお知らせ

第1回年次研究会及び総会を下記の要領で開催することになりましたのでお知らせ致します。お忙しい折と存じますが、万障お繰り合わせの上、是非ともご出席下さいませようご案内申し上げます。

日時：7月7日（土）10時30分より
場所：中央大学駿河台記念館 360号
千代田区神田駿河台3-11-5
03(292)3111

会費：参加費 1,000円 懇親会費 5,000円
スケジュール：

10:30

基調講演（沢田允茂氏）

12:00
運営委員会

1:00
会員総会

2:00

シンポジウム（森博氏、高島弘文氏、浜井修氏、司会 上原行雄氏）

5:00
懇親会（580号）

7:00

*つきましては、同封の葉書にて研究会及び懇親会への出欠をお知らせ下さい。

ポパー哲学の魅力

濱井 修（東京大学文学部）

カール・ポパーの哲学が、多くの哲学「専門家」に不人気なのは、洋の東西を問わずである。私自身かつて先輩教授から「君はポパーなんかに関心をもっているのかい」とか、「ポッペリアンなんて言葉があるとは知らなかったよ」とか、ポパーについて研究することは哲学者として恥すべきことのような口吻で言われたことがある。また、ポパー哲学の内容についても、別の先輩から「私は彼の言う〈反証可能性〉ということが〈検証可能性〉とどう違うのか判りません」と言われたが、この「判りません」という言葉は明らかに、「両者の違いを云々するのは馬鹿げている」ということを暗示していたのである。今、これらの言を紹介したのは、あらためて先輩方に文句をつけるためではない。おそらく、わが国の哲学界の大方のムードがこれらの言辞によって示されていると思ったからである。

しかし、こうした「哲学者」の評価とは裏腹に、哲学「門外漢」からのポパーに対する関心は一時かなり高かったように思われる。その理由の少なくともひとつに、彼が多くの哲学者の文章に認められるような難解な言葉をほとんど使わずに、ごく日常的な言葉使いによって核心をついた議論を展開していることが挙げられる。ここで核心をつく議論と言ったのは、彼の議論が哲学の伝統的課題である宇宙（世界）、人間、知識をめぐる議論であったことを指す。いわゆる「専門哲学者」は哲

学の伝統的課題に直面して、しばしばその主題を表現し、捉えるための言葉の検討に精力を注ぐが、その挙句の果てが単なる言葉（ドイツ風に言えば概念）の意味の詮索に終始しがちである。ポパーはよく知られている通り、哲学者によるこの種の意味の詮索を嫌い、平易な言葉を用いて単刀直入に主題に切り込んでいく。これがポパーが多くの「門外漢」を惹きつける理由の第一と思う。

第二に、彼の批判精神である。古代のプラトン、アリストテレスから近代のヘーゲルに至る哲学史の権威を完膚なきまでに批判する論議に接するとき、我々は彼の合理主義を形容する「批判的」という言葉がダテにつけられてるものではないことを実感する。改めて言うまでもないが、ポパーの方法論は批判的吟味の方法論である。この「批判的」の含意するところは広い。勿論、例の「事実による反証」が最も重要な「吟味」すなわちテストであるが、反証可能性が批判的討議の可能性と言い換えられるとき、吟味の意味は明らかにより広義のものになっていると思う。実際、この方法論は、もともとアマーバにも認められる「試行錯誤」の方法を理論化したものであり、人類の思想史においては古代ギリシア以来の批判的思考の伝統を受け継ぐものであるから、「事実による反証」の方法は広義の批判的方法を経験科学、特に自然科学の一部に適用したに過ぎないと言ってもよい。

批判的テストの方法論をこのように広義に解するのは、あるいはポパー自身の真意を誤解しているかも知れない。しかし、彼の方法論がこの種の「誤解」ないし「改釈」を可能にするある種の曖昧さを含んでいることも事実である（「反証」と「検証」の違いが判ら

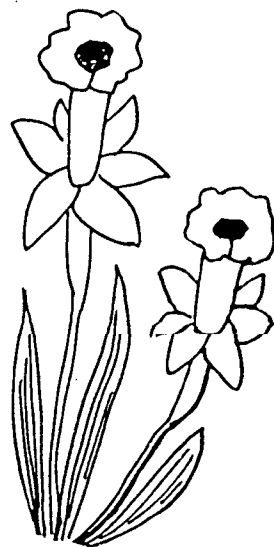
ぬと言われた先輩も、その点を衝かれたのであろう)。そして実はポパー哲学が専門の科学哲学者からの貶下とは裏腹に、「哲学門外漢」の社会科学者からの熱い関心の的となるのも、こうした批判的方法論のもつ広い含意にあると思われる。

批判的方法論がポパー哲学の魅力の第二点だとすれば(そしてこれこそ私自身を含めて多くの人々の心を惹きつける第一の点であるが)、第三に挙げられるのが、彼の哲学のもつ「開放性」であろう。「誤りの排除」を旨とする反証理論もそうだが、彼の理論は一見すると蒙昧主義的諸思想を厳しく否定排除することを身上とする厳格なりゴリズムであるかのごとき印象を与え、ときにエクセントリシズムと結びついているとの印象さえ与える。少なからぬ「ポパー嫌い」を生む所以である。たしかに彼の思想は方法論的一貫性をそなえ、その故に自然と人間の広範な領域に及ぶ彼の諸見解が一種の体系性をもそなえていることは明らかである。しかし彼の哲学の体系は決して閉ざされたものではない。彼にとって閉ざされた体系など「閉ざされた社会」同様、唾棄されるべきものであろう。かりにポパー哲学の体系と言うことが許されるとすれば、それは未来に向かって開かれた、限りなく成長すべきものであろう。「成長」もたんに彼の認識論の主題にとどまらず、彼の思想自体の性格を表現する言葉だと思う。

ポパー哲学体系の開放性を遺憾なく示しているのが、後期に展開した思想、「客観的精神」あるいは「世界3」の理論や自我論などである。初期の理論によって、こうした後期の諸理論への「成長」を予想し得た者がいるだろうか。例えば「世界3」理論など、初期

の「ポッペリアン」でも距離をとらざるを得ないのではなからうか。だが私自身は、ブライアン・マギーなどと共に世界3理論の魅力に強く惹かれる者の一人である。例えば私の専攻分野である倫理学の主題に「価値相対主義」の問題があるが、この問題について初期の社会哲学的著作に劣らず、多大の示唆を与えてくれるのが後期の理論である。

ポパー哲学は後期の理論をも含めて、開かれた体系をもつ開かれた批判主義として、限りない魅力をもって私の心を惹きつけるのである。



急逝 William Warren Bartley III

本年2月にWilliam Warren Bartley III氏が急逝されたという悲報が伝えられました。ここに、Kresge氏からの訃報、小河原氏およびRadnitzky氏からの追悼文を掲載すると共に、Bartley氏の御冥福を心よりお祈り申し上げます。

33 Castle Lane
Oakland, California
94611

On February 5, 1990, William Warren Bartley III died of cancer at his home in Oakland, California. He had made a valiant struggle since learning of the disease in July, and the loss of him must come as a shock to all his friends and colleagues. He has requested that there be no memorial service.

We shall, of course, each of us remember him in our own ways, knowing that his loss is irreparable, and that the work he had tried even at the end to leave us will go unfinished. The work that he did leave remains in its vitality a wonderful consolation. Contributions may be made to the Cato Institute, Washington, D. C., and to the Institute for Humane Studies, George Mason University, Fairfax, Virginia.

If I can help you in any way, please do not hesitate to call on me.

Stephen Kresge



パートリー教授を悼む

小河原誠（鹿児島大学法文学部）

教授の訃報を受け取ったのは2月20日のことであった。わたくしは、異様な言葉の放つ衝撃に全身を打たれ、にわかには意味をくみとることもできなかつた。まったく陳腐な言葉ながら、信じ難かつたし、信じまいとする気持ちでいっぱいであった。なぜ、かくも優れた、そしてやさしさとウィットに満ちた人物が人生の絶頂において命を失わねばならないのか。ハイエクやポパーは健在であるというのに、伝記者の方が先に亡くなってしまふとは。われわれは真に掛け替えのない人物を失ってしまった。ポパー、ハイエク、ウィトゲンシュタインを中心とした思想史的研究、そしてまた汎批判的合理主義へのさらに大きな貢献を彼に期待することはもはやできないのである。損失ははかり知れない。まことに痛恨の極みである。

目下のところ、ご経歴のおおよそを追うにとどまることを遺憾とするが、手もとの略年譜を参考にしつつ、やがて然るべき人によって刻まれるべき墓碑銘の一端をたどっておきたい。教授は1934年にピッツバーグでお生まれになった。父方はScots-Irish系で、アメリカの独立戦争以前から、ピッツバーグのPresbyterianであり、母方はドイツのウエストファリア出身でツヴィングリ系の改革派教会に属していた。教授はたいへんに敬虔なご家庭に育ったようで、すでに小学校2年の終わり頃にはバイブルすべてを読み終えていたというし、グラマー・スクールを終えるときには全体を6回は読み終えていた上に、神学書も手あたりしだい読んでいたということである。

ハーバード大学時代にも、勉学の傍ら、神学上の問題を考えつづけておられていたようである。卒業論文は、歴史における説明の論理に関するものであった。この研究の過程で分析哲学あるいは科学哲学の発想法を身につけられ、その光のもとで卒業後にティリヒ、ニーブル、バルトなどを再読されたときには耐え難い不満を覚えられたという。この頃にはすでに無神論者になっておられたようである。教授が1957年から58年の冬にかけて書き、ポーエン賞をもらったという論文のタイトルはOn Deciding — 筆者未見 —

であるが、このタイトルは、「コミットメントへの退却」を念頭においてみると、教授の問題がどのようなものであったかを暗示しているようにも思われる。

1958年秋にはフルブライト奨学金を得てポパーのもとに留学した。彼が汎批判的合理主義の基本構想を得たのは、ポパーがウィーンで目の手術を受けた1960年2月頃であったという。プロテスタンティズム批判という文脈のなかで汎批判的合理主義を述べた「コミットメントへの退却」は1962年8月に刊行されるが、この間、1961年1月にはポパーのもとで論理学の講師となり、また同年には有名なワールブルク研究所の研究員となられた。（この職は講義の義務のない素晴らしいポストであったようである。）しかしながら、「コミットメントへの退却」の刊行後はアメリカに帰ることを考えられていたようで、ピッツバーグ大学（1967～1973年）を経て、カリフォルニア大学に移り、1984年来フーバー研究所の上級研究員の職にあられた。ピッツバーグ時代にはイギリス時代から開始されていたウィトゲンシュタイン研究をまとめられたし（拙訳「ウィトゲンシュタインと同性愛」未来社、5月中旬刊）、たいへん興味深い小冊子「宗教と道徳」も刊行されている。ポパーとの関係が回復したのは74もしくは75年である。Lewis Carroll's Symbolic Logic や Werner Erhard: The Transformation of a Manが刊行されたのはカリフォルニア時代になってからである。

教授の生涯は決して永かつたとは言えないが、業績はここに言及したものの他にも多数あり、まことに多産であった。教授のご業績が今後とも未長く論じられることを願ってとりあえず筆をおきたい。（1982年までの業績一覧表が筆者の手もとにあります。必要とされる方はご連絡ください。）



WILLIAM W. BARTLEY III (1934-1990)

19 April 1990
Gerard Radnitzky

The sudden death of Professor Bartley is a great loss not only for Critical Rationalism but for the scientific community and for philosophy. For his friends and for those who had the privileges of knowing him personally it is an enormous loss. Sir Karl Popper wrote of Bartley: "I can say that he was one of the most brilliant students I ever had; perhaps the most brilliant of all." He came to the London School of Economics with a first class record from Harvard. His career at the LSE was most unusual. He impressed all as an absolutely first class man in every respect, and he was appointed to a lectureship. His Ph.D. thesis was at once (1962) published as a book by A.A. Knopf in New York and by Chatto and Windus in London. Its quality and originality were immediately recognized; it was translated into German, French and Italian. The Retreat to Commitment is perhaps the solution to the problem of the limits of rationality. This theme is developed in his "nonjustificational theory of criticism" (his "pancritical rationalism").

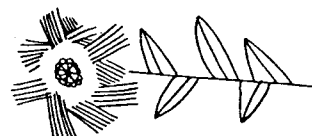
Professor Bartley held many professorships: his first appointment to a full professorship, at the University of Pittsburgh, was in 1969; Professor of Philosophy at California State University, Hayward, in 1970; he was named "Outstanding Professor" of the entire California State University system (which includes some 300,000 students). His last position was Senior Research Fellow at The Hoover Institution of War, Revolution and Peace, Stanford University. He has lectured extensively in Austria, Germany, France, and Italy.

Bartley was a seminal thinker who pursued several lines of

endeavor with great studies of major figures. He discovered and reconstructed some lost work of Lewis Carroll, and wrote a brilliant study of the mind of the Austrian philosopher Ludwig Wittgenstein. His study Wittgenstein has been translated into several languages(Japanese transl. for Keiso-shobo publ.). Also his biography of Werner Erhardt was a great success. The great enterprises: the biography of Karl Popper and that of Friedrich von Hayek, both already in an advanced stage, he, unfortunately, was not able to finish.

Bartley has had a glittering academic career replete with prizes, scholarships, and fellowships at some of the most distinguished universities in the world. He took also the job of editing the work of others seriously. Outstanding in this respect is the editing of Sir Karl Popper's major work Postscript After Twenty Five Years, to The Logic of Scientific Discovery(three volumes)/Editor-in-Chief of Hayek's COLLECTED WORKS and editing of Hayek's latest book The Fatal Conceit: The Errors of Socialism, and co-editing the collection Evolutionary Epistemology, Rationality, and The Sociology of Knowledge, in which he also developed his ideas on the growth of knowledge and the theme of unfusing criticism from justification thereby showing that also in the foundations of logic and rationality there need be no inconsistency in a thoroughgoing critical attitude.

We will miss him - yet we are all grateful to him for his guidance and wise counsel, his wisdom and his good humor.



新著紹介

The Popperian legacy in economics,
Edited by Neil de Marchi, Cambridge
University Press, 1988.

堀越 比呂志（青山学院大学経営学部）

1.

本書は、J. J. Kiant の退任記念として、アムステルダムで1985年12月17日と18日の2日間にわたって開催されたシンポジウムと議論の結果であり、16人の参加者のうち11人が本書に論文を寄稿している。本書は、編者Neil de Marchiの序論とディスカッションに続いて、パートⅠ：科学哲学者としてのPopper、パートⅡ：経済学者内でのPopper、パートⅢ：反証とそれなしの試み、パートⅣ：見落とされた話題：経験的作業とその評価、パートⅤ：経済学における非Popper派の視点、という5部構成になっている。

2.

Popperの科学哲学が経済学で初めて紹介されたのは、本書の寄稿者の一人であるI. W. Hutchison のThe Significance and basic Postulates of Economic Theory (1938) においてであった。この先駆的業績をきっかけとして次第に科学哲学全体の研究状況が導入されていったのであり、経済学における科学哲学との接触はまさにPopperの科学哲学から出発したと言える。

1930年代以来、経済学には、正統派におけるアプリオリに真である前提に基づく抽象的・演繹的方法と、歴史学派や制度主義における経済的・歴史的事実の重視による具体的・帰納的方法という2つの方法論的

信念が存在していた。Popperの科学哲学はこの2つの方法論的信念の調停役を果せると思われたために、多くの経済学方法論者や経済学説史家に受け入れられたのである。しかし、Popperの科学哲学を基にした経済学方法論者や経済学説史家の研究の進展とそれに伴う最近の科学哲学における諸成果—特にKuhn, Lakatos, Feyerabend といった人々の諸成果—の導入とともに、Popperに対する当初の期待は次第に薄れてきているのが現状である。

このような展開を背景として、本書で報告されているシンポジウムに多くの経済学説史家や経済学方法論者が集い、最近の科学哲学から学んだもの、特にPopperの哲学から得たものを徹底的に考えようとしたのである。

3.

編者のde Marchi は、この2日間の討論の過程において4つの基本的立場を認めている。

第1の立場は、多くの修正があるにもかかわらず、ポパー派を擁護する立場である。この立場には、パートⅢの寄稿者であるI. W. Hutchison とM. Blaug が属し、ともに、J. R. Hicks をとりあげているが、特にBlaug は、Hicks の著作には一貫性と統一性が欠けており、これは経済学理論に関するHicks の歴史的相対主義の意識がもたらしたのだと述べる。

第2の立場として、方法論的多元論を主張するB. J. Caldwellの立場がある。これは、経済学者の実践というよりは経済学方法論者の実践を変えることを求めているという点で特異なものである。

第3の立場は、まったく新しい方法論的立場であり、言語学の領域にその焦点を置く。この立場には、D.N. McCloskyとA. Klammerが属する。McCloskyは、形式的科学哲学に強い不平を唱え、経済学における方法は、数学的あるいは統計的であるというよりは、隠喩的で物語創作的であると考え。それ故、このような科学の適切なルールとは、良い会話に関する基本的ルールということになる。

第4の立場には、パートIIとパートIVの4人の寄稿者が属する。これら4人に共通な事は、実際に活動している経済学者の行動を認定した上で、Popperの良い科学のガイドラインを用いて経済学を理解しようとすることの限界に注意を喚起しているという点である。D.W. Handsは、アドホック性に関するPopperの使用法とLakatosの使用法を区別した上で、経済学において特に重要とされるのはLakatosの意味でのアド・ホック性—すなわち肯定的発見法の精神に一致しない補助仮説の修正という意味でのアド・ホック性—の回避であると主張する。続いてN. de Marchiは、Popperの科学哲学がLSEの若い経済学者に強い影響を与えたにもかかわらず、比較的短命に終わったいきさつを記述し、Popperの科学哲学が経済学に浸透しなかった理由を考察している。M. Morganは、計量経済学におけるテストの考え方とPopper流の科学哲学におけるテストの考え方とは同じではないことを指摘する。取次、E. N. McCloskeyは、Hansを採り用いて、neo-Walras派の理論と実践の相互作用は、科学的に前進的だと主張する。

以上の論文の他に、de Marchiの序論とディスカッション、そしてパートIを構成する2本の論文があり、科学哲学的背景と本書の全体的概観を得るための一般的導入の役割を果たしている。

4.

以上のように、本書においては、寄稿者11人のうちでPopperの科学哲学を肯定的に受け入れる者は、HutchisonとBlaugの2人だけであり、全体として、Popperの科学哲学の経済学に対する馴染みにくさに関する同意が優勢である印象を受ける。そして経済学におけるPopperの遺産について、de Marchiは、次のように結論づけている。「…大多数の者にとっては、様々な理由から、経済学には本当に実質的なPopperの遺産は何等無い、と結論することが公正であると思われる。このコメントは、Popperが説こうとした精神の批判的態度には当てはまらないが、良い科学の実践のために彼が提案した規則に言及するものである。」

しかしながら、この結論は、態度におけるPopperの果たした重要性を軽視しすぎているように思える。正当化的態度から非正当化的態度への移行、実在あるいは経験とのかかわりといった問題は、経済学の方法の現状を優先して無視されるべき問題ではないと考えるからである。そして、経済学において、この態度が具体的な規則や活動を生み出しえない態度であるのか、この態度が深く浸透していないが故に具体的な規則や活動が生れにくいのかは、現時点で早急に結論づけることはできないと考える。

掲示板

・「マーティン論における方法論研究の意義と行方—経済学者B.J.Caldwellの主張を手懸かりとして—」（青山経営論集 第24巻第4号、1990.3、pp.69-108）という論文を書きました。個別科学において、方法論研究がうまくリンクしていないという思いから、個別科学における方法論研究の意義とそのあり方について考えてみました。（1990 4.2 堀越比呂志）

・「開かれた社会を求めて：すべては批判に開かれている」と題して、坂部恵他編「命題コレクション・哲学」（筑摩書房、たぶん今秋刊）に13枚ほどでポパー哲学における批判の意義を解説しておきました。パラダイム論との違いのようなところに力点をおきすぎてしまって、開かれた社会について十分に述べるができなかったのが残念です。（1990 4.25 小河原誠）

・4月に「ポパー」川村仁也著（エンチュリー・ブックス 人と思想シリーズNo.85 清水書院 560円）が出版されました。一方で「自伝」、「開かれた社会とその敵」、「歴史主義の貧困」、「自己とその脳」など数多くの著作に基づきながら、また他方では社会的背景を考慮しながら、ポパーの思想を平易に紹介しています。また、マルクス主義者からの応答として、コーンフォースやジョン＝ルイスの主張も紹介し、反対者の主張にも配慮されています。ポパー哲学を知るための良いガイドブックといえるのではないかと思います。（1990. 5.1 冨塚嘉一）

掲載記事の募集について

論説・報告、新著紹介、掲示板などに掲載する原稿を募集しています。事務局までご投稿下さい。なお活発な議論を喚起するために原稿の審査は行わない方針です。

次号は10月発行予定です。

執筆要項

論説・報告:2400字-2800字程度で問題提起、コンパクトな形にまとめた論証、または内外の論調の紹介を含む。

新著紹介:1400字-2800字程度で新たに出版された著作を紹介するもので、翻訳を含みます。

掲示板:会員の情報交換の場です。ゆくゆくは学情の電子掲示板に主役の座を譲りたいと思っています。

200字から300字程度で皆さんが現在追いかけているテーマ、新しく入手した情報、文献の発見、あるいは質問、経験談、はては噂話まで、なんでも結構ですからお寄せ下さい。

編集後記

★丹沢氏より引き継いだものの不慣れなため作業が遅れてしまい、また、年次研究会のための調整など手間取り、発行が遅れてしまいました。多数の投稿を頂けたことが救いです。今後ともよろしくお願い致します。（冨塚）

ポパーレター(通巻第2号)1990年5月発行

発行人 碧海純一

発行 日本ポパー哲学研究会事務局
〒192-03 八王子市東中野742-1

中央大学商学部 冨塚研究室

0426-74-3592